子供と天然

安井哲子

始終霧が深くて、甚しい時には白晝でも街燈を點じ、それでも尙人の顏が見えぬ事さへもある樣な英蘭に暫く住んで居りますと「悲しみで樂しみを取る」と云ふ樣な、誠に沈んだ、眞面目な、心持になつて來ますが、一つ海峽を渡つて隣國に往つて見ますと、空と共に心までが晴れ渡つて、自然に浮き々々する樣になつてまゐります。此心持の變化は丁度眞面目な英吉利人と、快活な佛蘭西人の性質とを說明致す事が出來ます。又春先になつて櫻の花の咲き初める頃には、如何に不精な人間でも外に出掛けて見たくなり、冬になつて雪でもちら〳〵降り初める頃には、如何に元氣な人でも火鉢の側がなつかしくなるのは當然で、實に氣候と云ふものは人の氣分に驚くべき影響を及ぼす者で御座ります。

獨り氣候ばかりではなく、四方山ばかりで圍まれて居る國には中々自信力の强い人が出來、風景の良い國には美術家が生れ出る事のあるのは度々其實例を見聞する所で、即地勢が人の心に感化を與ふる事の大きいのも、亦實に驚くべき事で御座ります、實に人間が高尙になり、不高尙になり、又賢くなり愚になるのは、固より生來でも御座り

ますが、又一方には其周圍が大層關係を持つ者で御座ります。茲に周圍と申す意味は誠に廣う御座りますが、前申した通り吾々を取卷いて居る所の宇宙も亦其一つで御座ります。

一体子供は大人よりも一層外部の刺戟に感ずる力が強う御座りまして、其強い所が即子供が其心力を發達させるに尤必要な所で御座ります。夫故子供の周圍は成るべく健康に且優美なる事が肝心で日々目に觸れ耳に聞く所の者が知らず識らずの間に子供の腦髓に印象して、それが感化を與へて居る事は中々大きなもので御座ります。

御覽なさい。スキツランドの山の中に參りますと、山にも野にも、羊や牛が放してありますが、夕方になりますと、幼い子供が是等の群を引連れて家に歸つて行く有樣、子供の何倍もありそうな大きな、而も恐ろしい角のある獸が、從順に力ない子供の後を慕ひ行く有樣、此兩方の心の中に入つて、私の樣な感の強いものは實に泣きます。そうかと思へば青い色を少しも見た事のない、眞黑な煙だらけの都會に行つて見ますと、子供達が苦痛を訴へる事も出來ぬ無力な動物を虐待する樣、實に兩方の爲めに泣かざるを得ません。

どちらも皆貧民の子供、併一方は山水の間に牛羊を友として暮す者、自然に潔白な、正直な性質と、憐れな動物に對して無限の同情とを養はれたもので、又一方は俗の俗たる社會の眞中に育つ者、食べる事の外には何も興味を持たぬ者、利己心が增長して、同情心などは何處にあるやら分らぬのも實に境遇の致す所、無理もない次第で御座ります。併かういふ子供も、偶慈善家の爲めに廣々と

した青い山野に二週間許も連れて行かれた時は御覽なさい。丁度籠の鳥が急に放された樣に、自由自在に草の中や森の中を驅け廻ります。見上ぐる峯には氣を挫かれ、見下す川には心を洗ふて、今迄かくれて居るやさしい無邪氣な所が心に表はれて來ます。夫故惡少年を感化する爲めに與ふる仕事の中で、園藝や、耕作や、家禽を扱はせる事が、大層價値のある譯で御座りませう。

私が曾て逗留致した牛津の或家に八つと十とになる女の子供が御座いました。丁度秋の頃で蔦や木の葉が紅葉して誠に奇麗な川岸を一處に散歩に參りましたが、道々「何といふ奇麗な木でせう」と云ふ言葉は度々可愛らしい子供の口から漏れました。又私の滯在中其母親の誕生日が御座りましたが、母親は其日室の中に可愛らしい草花の咲いて居る小さな植木鉢を見出しました。どうでせう。之は此可愛い子供達が學校の歸り途に公園で探して來て、玩具の植木鉢に植ゑたのですと何と奇麗な心を籠めた贈物で御座りませんか。

概して天然を愛し、動植物を友とする者は、情が深く、徒に草木を傷け、虫魚を苦しめる者は、終には人の生命をも輕んずる樣な恐ろしい者とならぬとは申せません。夫故英吉利の家庭や、幼稚園で毎日子供に金絲雀の世話をさせたり、又は植木に水をやらせるなど、小鳥や、家畜や、植物の爲めに自分が手を下して、やさしく世話をしてやると云ふ習慣をつける事は誠に美しい事であると考へます。

此間或監獄署長の話に罪人に家禽を畜はせたら宜からうと云はれましたが、私は實に同感でど

うか下等社會の幼兒の集る幼稚園などでは、耳からのみ教ふるよりも、實際金魚を吾つたり、小鳥の世話をしたり、種を蒔いたり、水をやつたりする樣な極美しい、やさしい仕事をさせて暴々しい、殘酷な性質を良い方に向けてやつたなら、其子供の爲ばかりか社會の爲めにも誠に好ましい結果があらはれるであらうと考へます。

君が代は千代もとざゝト天の戸や　　淡　歳

出る月日のかぎりなければ

親馬鹿といふを讀みて

ふみ子

第一卷第十號の家庭欄にヒッホ、ダモス、アイランド氏は親馬鹿と題して、左のごとく記されました。

二十四

『此間母親が庭で何かして居つて、彼れ（五才の男兒）が畫いて居た躰のしれぬ繪をふみちらしたとかいつて、彼大に腹を立てゝ、「折角書いたものをお母さんが消してしまつた」といつて泣き出して「御免なさいといひなさい」とせまります。そこで母親は知らなんだのだから、さう腹を立てるものではないと却て堪忍といふことを教へようとします。遂に母を打つた（中略）

斯樣な場合に母親が子供に詫をしたもいであらうか。子供の道德の最初は親に服從するにあるとかいへは、或は獨裁權をふるうて親に向つて、何だと叱りつけたものであらうか、はた堪忍を教へたものであらうか。』

右のやうな場合に、皆さんは如何な風にしていらつしやいますか。私は一も二もなく阿母さんは